
タイトル未定

高比良 柚与

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

タイトル未定

【Nコード】

N7173D

【作者名】

高比良 袖与

【あらすじ】

生きていられなくなった主人公が、ある日突然訪れてきた殺し屋と名乗る青年と彼是する話。

(前書き)

登場人物の設定のようなもの。

僕・・・××
青年・・・彼

タイトル未定

0 .
ありがとう、さようなら。
言葉は輪廻する。

1 .
おはようございます。と、誰もいない部屋に呟いて、僕は自室へ入った。

「誰か………。僕を殺してくれる人はいないのかな……。
・？」
窓の外で、太陽が白く耀いている。外に出れば、熱気が僕を飲み込むのだろう。と思った。

暑いのは嫌。
寒いのも嫌。
暑すぎるのは嫌。
寒すぎるのも嫌。

この国は、僕を死なせないつもりだろうか？ 暑ければ死体は腐って、検視官の人に迷惑がかかるし、寒ければ、死体は内から外へ冷える。

どちらも嫌な死んだ後で、どちらも嫌な 選択肢だ。

「……死にたい」

こんな生活……、こんな人生……。真っ平ごめんだ。こんな思いをするくらいなら、まだ死んだ方がマシだ。そんなことを思っていたら、家のチャイムが鳴った。

「こんにちは　××さん」

扉の向こうの人は僕を呼ぶ。どうやら男のようだ。

「はい。どちら様で……」

「あ・間違った。おはようございますだった」

独り言を呟く僕の真正面に立つ少年のような、青年。

「おはようございます。殺し屋です」

扉を開いた後に言われたので、閉めるタイミングをすっかり逃してしまった。もう既に十秒以上は経ってしまっている。

「……はい？」

「だから、殺し屋です。死にたがり屋の××さん。……いや、違うな。殺されたがり屋の××さん。かな」

目の前に立つ青年は女子のような笑顔で言った。

「死にたいのに死ねない××さんを殺しに来ました。二日以内に殺せといわれているので、その内に殺害する予定なので、よろしくお願いします」

「……この男は何をしに来たのか、二時間後に僕は理解した。」

2 .

「理解して頂いて良かったです。実は自分、派遣の人間なんですよ」

「はあ……」

コイツは本当に殺し屋か？　と思わせるくらい、彼は素直な青年だった。こうして殺しを繰り返す事によって、人は心から穢れていくのだな……。そう思った。

って、そんなこと思っても僕には何の関係もないけれど。

「××さん、何でそんなに死に方に拘るんですか？　面倒じゃない

ですか」

面倒………？

「いや、別に面倒じゃないよ。てか、死に方に拘るって………。死ぬときに辛いのも、誰でも嫌じゃないか。苦しかったり、眩暈がしたりするくらいなら、まだ生きる方を選ぶよ」

「………へえ」

彼は、納得したのか、していないのか。微妙な返事を返してきた。てか、そもそも殺し屋に派遣社員とかあるのか？　つか、会社？　？　組織じゃなくて？？

………？

「うん。まあ、大体は分かりました。辛い思いとかしたくないんですよね。はい」

「………」

分かってんのか？　コイツ。

とか思ったけど、僕は彼に任せることにした。

3 .

「いやいやいやいや！　だから何で窒息死！？　もう、自棄になっ
てんじゃねえよ！　お前、本当に殺し屋か？！　普通に考えろ。窒
息って、苦しいじゃねえか！」

「必至に考えてあげたのに、全部断った××さんが悪いんですよ！
何で、全部拒否するんですか！？　最後のやつなんてもう、ジエ
スチャーだったじゃないですか！　そこまで拒否らなくてもいい
のに………。そこまで言うんでしたら、××さんも考えてく
ださい！」

「お前が提案したの、全部苦しみを伴うんだよ！　てか、考えるの、
お前の役目だろ？！」

僕と彼は、僕の死に方について口論していた。

「先に言ったじゃないか！ 苦しかったり、眩暈がしたりするのは嫌だって！！！」

「ですけど、死ぬ時に苦しみは付き物です。それくらい我慢してください。毒薬飲むわけじゃないんですから」

我慢できないから言ってるんですけど………。

僕の言葉も虚しく、彼は携帯を広げてどこかに電話をしだした。

何だコイツ？

「もしもし？ 俺ですけど。はい、………はい、そうです。

ええ。この人ってこんなに我侘だったんですか？ ……。

………はア！？」

彼は耳に当てていた携帯を取り落とした。呆然とした顔で、僕を見ている。

「あんた………。そんな人だったんですか………。

？」

「うん？ 何の話？」

携帯の向こうで男が喋っていた。

「もしもし、T君？ お久し振りだねえ。うん、元気？ 僕の方は

知ってるの通りさ。そうだよ、あの日から何も変わっちゃいないよ」

あはは。そうそう、そんな感じ。ははははははは。

彼は未だ呆然とした顔で僕のほうを見ている。

「それで 彼には何が出来るんだ？」

へえ、そんだけ。どんだけえへははは。

「す………いませんでしたあ！」

「何？ いきなり。びっくり出来ないよ。いきなり過ぎて」

彼は今、僕に向かって何故か土下座をしている。別に、何もしな

くていいのにさ。

へ、今まで僕に刃向かった罰さ。

「……××さんが、望む死に方で、よろしく願います」

4 .

走馬灯って、あれだろ。脳内限定レイトショーみたいなやつ。……だっけ？

「え?! 眉間に一発ですか?」

「そうだよ。その方が早いから」

驚く彼に対して、僕は冷静に言った。いくら殺し屋派遣社員でも、人間の急所か弱点は知っているだろうよ。そう僕は薄っすらと思っ

7

た。
「君、新人の中で一番射撃の命中力よかったんでしょ? てか、高
いんだろ? なら僕をたった一発の弾だけでころせる……」
「……ころしてくれるだろう?」

殺してくれる筈だ。そう思った。

「え、でもですね……××さん、あなたは」

「追われてるよ。元仲間だね。裏切ったしね、奴等を」

彼の表情は沈んでいた。てか、沈むのって僕じゃない? 何でこ

イツ??

「だったら……ここに居る俺も危ないんじゃない? ……」
「……!」

「自分優先かよ。僕が君を殺すよ」

「いや、それは……」

彼がここには危ないと思ったのは、彼がここに来た瞬間から。でも、よくここにこれたものだと思う。この周辺は多分、奴等が見

張っている筈だ。号室だつて、とつくに割れている筈だ。

「しにたくなかったら帰っていいよ。多分、奴等も動き出す筈だし・
・・・・」

その時、家のチャイムが鳴った。本日二度目の来客。今日はどう
した？ 別に、パーティーなんかやってないんですけど。

覗き穴から、外を窺う。

ああ、もう来たの？ 早いよ、君たち。

「はい」

扉を開けると、黒スーツの男が四、五人。容赦なく入ってきた。
ある意味、不法侵入。

「貴様・・・・・。××か？」

「ご覧の通り、××とは」

僕のことだ。

「俺のことだ」

僕と黒スーツの会話に、彼が割り込んで来た。何で僕の名前を名
乗ったのか、分からなかった。

「は？」

「・・・・・。××さん、ここから逃げてください。即急に
彼は小声で僕に言った。

5 .

どんまい、自分。

この場を任すか、任さないかは自分次第だ。

「えつとね、君・・・・・。逃げるのは君の方だよ」

「いいえ。あなたです」

彼の目は真っ直ぐだった。最初・・・・・数時間前に会った時
とは全く違う目をしていた。僕は直感した。

彼は、僕が何故死にたいのか、分かったんだ。

何故僕が、

こんなにも、

殺されたがったのか。

分かったんだ。

分かってしまったんだ。

「……………そうか。だったら、君は早く逃げなよ。ここにいても、短い人生に幕を下ろすだけになってしまう。楽しくない僕に付き合つて死ぬより、楽しい人生に付き合つて死になよ」

「どう言う意味がよく分かりませんが……………。俺は逃げませんよ。あなたは、未だ死んではいけない人間だ」

彼は本当に知ってしまったらしい。

「まだ死んじやいけない？……………もう死んでもいい頃合さ。君も殺し屋なら分かるだろう？……………裏切りは、己の命で償わないと意味を成さないものだよ」

「やっぱり、それがあなたを縛り付けていたんですね。俺が予想した通りだ」

彼は僕の盾になるように、目の前に立った。黒スーツの男。四、五人はスーツの内から黒い光を放つ一丁の拳銃を出して、彼に突きつけた。

「俺のことは気にしないで下さい。死んだら、あの人を処理してくれる筈ですから」

あの人〃T君

という式が浮かんだ。なるほどね、そりゃT君なら来るわな。だって、T君は死体処理班の担当だからね。

「お別れの挨拶は済んだのか？ x x」

「冗談言えよ。俺はお前等なんかには殺されるほど、弱かねえぜ」

彼は僕を名乗って、目の前の男と会話をしている内に、ベレッタM92の牙は、彼に向く。

「貴様が行った行為、死んで詫びるがいい」

先ず、先頭の男が。引き金を引いて、彼に向かって撃った。その弾を見事かわした彼は、次に飛んで来る弾に備えて態勢を整える。

「……………ちよつと待つてくれよ。何で、君が……………」

「貴様、何者だ？」

「……………僕が××だよ。彼はこのことに一切関係ない。僕の知人だ」

気が付けば、彼の前に飛び出していて。

気が付けば、彼に取り押さえられていた。

「何やつてるんですか！？早く逃げてくださいよ！！！」

「これは僕に関係しているんだ。君には、巻き込まれる理由なんてないんだ。だから、ここを早く」

彼が、僕の視界から消えた。床に、うつ伏せて、倒れていた。

「何をごちゃごちゃと……………。貴様が××であるのなら、殺すだけだ！」

黒スーツの男が構える。倒れている彼は、背中を撃たれていた。

「……………僕に関わると、皆こつなるんだ……………いいよ。僕を殺せよ。ぐだぐだ生きても 苦しいだけだし」

だん。

と。

「……………」

「な」

「……………」

額に、いや、眉間に、何かが当たった。少し前まで平気で触っていた、鉄の、鉛の重さが、それを弾丸だと、理解した。

崩れる。

「……………」

有無を言わず、

崩れ墜ちる。

6 .

言葉が、輪廻する。

僕の中で、輪を描く。

死んだ。

僕は死んだ。

死ねなかったけど死んだ。

死にたかったから死んだ。

ありがとう。

僕を殺してくれて。

さようなら。

僕を殺した人。

ありがとう、さようなら。

僕の中で、言葉は輪廻する。

僕の中で、言葉が輪廻する。

ありがとう。

僕を殺してくれて。

さようなら。

僕を看取ってくれて。

さようなら。

僕を殺しに訪ねて来てくれた人。

ありがとう。

僕のことを識^しってくれて。
君に殺されて、僕は充分満足だ。
これでやっと、僕は
楽に逝ける。

ありがとう、さようなら。
僕の中で、輪廻は止まった
。

(後書き)

学校で休憩中に思いついた、冒頭の“ありがとう、さようなら。”から作った、即興の小説(?)です。

数人の人に読んでもらったけど、

「暗い。暗すぎるだろ」

とかダメ出しをされましたが、ここに載せることにしました。暗すぎました。すいません・・・orz

こんな、「また殺し屋？」みたいな話ですが・・・。

区切りの数字は特に意味はありません。ただ、何となく付けて見たと言う感じでした。

タイトル未定

PDF小説ネット発足にあたって
PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7173d/>

タイトル未定

2009年7月1日21時17分発行